

NO.217 2月号

FOREST NEWS

未来を育てる木を植える
未来を守る木を植える



2026年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会 発行人 藤生輝彦

〒182-0021

東京都調布市調布ヶ丘2-15-1ビリアベルデ407号

TEL:042-449-0183

ホームページ <http://midori.mond.jp/>



01

理事長メッセージ



1人年間150本植えて自分の排出したCO2をオフセットしよう！

【2026年の気候予測】 加速する地球温暖化と異常気象の常態化

2026年の予測は「気候変動の加速」と「異常気象の常態化」です。今年の世界平均気温が工業化前とくらべ1.4℃から1.5℃以上上昇する4年連続の年となり、記録的な暑さが続くでしょう。日本では夏は例年より早く到来し猛暑となる予測です。昨年より雨の量が多く、夏の終わりから秋にかけては台風や長雨による災害に要注意です。

【個人でできる温暖化対策】 27年目を迎える市民レベルの植樹活動

地球温暖化ストップのための最も早い対応は個人および家庭レベルにおいて可能です。すぐ行動を起こせるし、小規模のためほとんど費用が発生しません。当法人はそこに着目し、市民レベルの植樹を国内外で26年継続、今年で27年目になります。累計植樹本数は17万本を越えました。

【パラグアイでの取り組み】 CO2をオフセットする植樹の仕組み

特に会員の皆様にはパラグアイの8万ヘクタールの用地を開放し、そこに植えてもらっています。木は地球上どこに植えても温暖化ストップに対する効果は同じです。日本の一般的家庭における1人当たりのCO2年間排出量を基準とすると、それをオフセット（相殺）するために植えるべき本数は150本（スギの木換算で）です。

【誰でも参加できる環境保護】 現地スタッフによる代行と植樹ツアー

こうした因果関係を根拠に、1本でも2本でも要望さえいただければ現地スタッフが植えますから皆さんが現地へ行く必要はありません。また希望者には木の成長を見ていただくための植樹ツアーも実施しています。

【森の本来の目的】 豊かな生態系と生物多様性の回復

いったん植えられた苗木は着実に森を形成していきます。木の本数が増えるにしたがい、棲みかを失っていたジャガー、アメリカライオン、コアリクイ、オオアリクイ、アルマジロ、アメリカダチョウ、そして多くのインコの仲間たちがもどってくることでしょう。森は生物多様性を守り、私たちに最も豊かな環境を保証してくれる“緑の館”です。そしてそれが森の本来の存在目的なのです。



※画像はイメージです



地球の聖域、パンタナールが直面する危機と希望の「M&LEDA」

枯渇する「空の川」、今や乾いた平原？

世界最大の熱帯湿地パンタナールが、かつてない乾燥の脅威にさらされています。WWFなどの最新の分析によれば、水源である上部パラグアイ川流域の地表水は、過去30年間で実に75%も消失したとも…。パンタナールを潤す雨は、遠くアマゾンの森から運ばれてきます。巨大な熱帯雨林が吸い上げた水分を大気へ放出するこのメカニズムは「空の川

(Flying Rivers)」と呼ばれ、南米大陸の生命線を支えてきました。

かつてジャガーやカピバラが謳歌した広大な水辺は、今や「乾いた平原」へと変貌しつつあります。この劇的な水不足の背景には、地球温暖化による深刻な干ばつに加え、アマゾンの森林伐採がもたらす降雨パターンの変化があるといわれています。湿地が保水力を失うことで、本来は火災を防ぐはずの「天然の防火帯」も消滅し、壊滅的な火災が繰り返される負の連鎖に陥っているのです。私たちの足元から静かに、確実に「世界の生命の源」が失われようとしているのです。



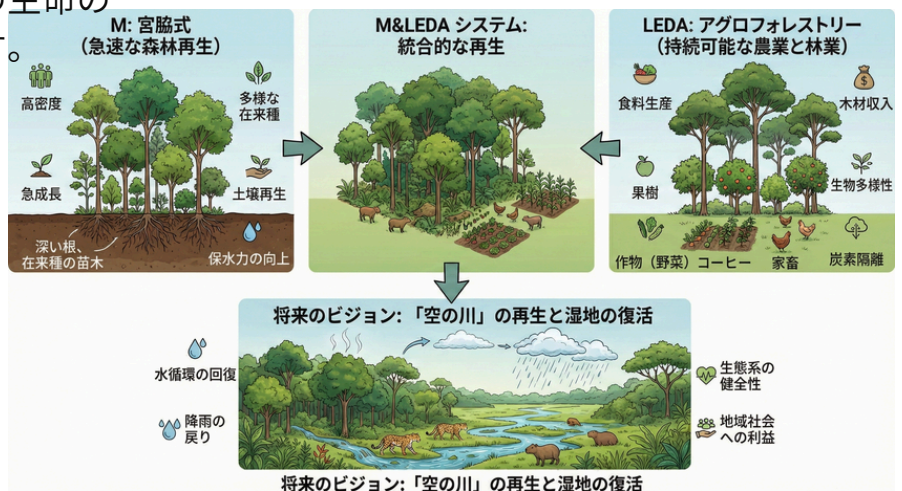
※画像はイメージです

連鎖する大火災による脅威

また、パンタナールは出口の見えない「火の海」へと変貌しています。2024年上半期のデータは、火災件数は前年同時期比約2000%増という異常数値を叩き出し、2026年に至る現在もその勢いは衰えず、湿地の深部までを焼き尽くす危機的状況が続いています。

この惨劇は、単なる自然現象ではありません。気候変動によって加速した「記録的な乾燥」と、人為的な「火入れ」が最悪の形で結びついた結果です。

2024年の研究によれば、気候変動はパンタナールの火災リスクを以前の4~5倍に高めており、火災の激しさは過去の平均を40%も上回っています。通常、湿地は水を湛えることで火を食い止める防波堤の役割を果たしますが、近年の降雨不足によりパラグアイ川の水位は過去40年で最低水準を記録しており、本来燃えるはずのない湿地の底泥までもが燃料と化しているのです。





未来を植える—M&LEDA方式が「空の川」と人の心をつなぎ直す

文総裁の願いと50km展開の設計図

パンタナールの悲鳴は、地球全体の気象システムの崩壊を告げるサイレンです。この危機を根本から食い止めるために、私たちが今すぐ取り組むべきこと、それが「植樹」です。その中でも本質的な解決へのアプローチとして期待されているのが、土地本来の植生を最短で復元する「宮脇式植樹」と、農業と林業を融合させ持続可能な収益を生む「アグロフォレストリー」を組み合わせた当法人が取組む『M&LEDA方式』です。この革新的なひな型を、パラグアイ川流域やアマゾン川流域に広く展開することこそが、崩壊した生態系を再生させる鍵となります。

なぜこの方式が必要なのか。それは、パンタナールの命運が、失われた「空の川」の再生にかかっているからです。M&LEDA方式によって多様な樹種が密集した「本物の森」を早期に形成することは、途絶えた水蒸気の供給路を再建し、数千キロ先の湿地を潤す雨を再び呼び戻すことを意味します。



※画像はイメージです

自然と経済が共生する戦略

しかし、植樹の真の価値はそれだけではありません。地域の人々が森を育て、そこから恩恵を得るプロセスは、私たちの「消費するだけ」の意識を「共に生きる」意識へと劇的に変えていきます。一本の木を植えることは断ち切られた生命の循環を繋ぎ直し、湿地に再び「水」を呼び戻すための最も根源的な投資ともいえるでしょう

50kmごとの拠点と国家連携

文総裁が環境問題、食糧問題の同時解決に向け、「アマゾン川パラグアイ川における50kmずつの拠点化」を示されました。（下記QRコード）当法人ではその指示を深化させ、実践段階にとして「50kmずつの任地」にM&LEDA方式をベースとした植樹活動を実施していきます。（2027年はアマゾン川,ブラジルのマナウス,タバチンガで計画予定）

環境問題の具体的な解決のモデルを実践、それを世界各担当国と連携して「人と自然の共生共栄の拠点」としてニュー・ホープ・ファームを築くという壮大な設計の第一歩を踏み出していきます。この計画を展開することにより「地球の肺」を蘇らせるムーブメントを起こしていく決意です。

「真の平和は、現状の問題解決とともに、未来の幸せを創ること」という韓総裁のビジョンのもと、50kmずつの任地から着実に理想の世界を現実のものとしていきたいと思ひます。



50kmずつの任地